太田素子さんの仕事

浅井幸子 *Asai Sachiko*

私は 2007 年 4 月から太田素子さんと一緒に保育専修の立ち上げを行い、2012 年 3 月までその教育に携わった。同僚だった時も今も、大田さんは私にとって、研究仲間であるだけでなく、指導教員のようであったり、姉のようであったりする。以下に記すのは、そのような視点から見た太田さんの仕事の一側面である。

太田さんが和光に着任した時は、江戸の家族史の研究者のイメージが強かった。『子宝と子返し』(藤原書店) が 2007 年 2 月に発売され、第 2 回河上肇賞奨励賞、第 6 回角川財団学芸賞を受賞している。この書では、近代的な子ども観や近代家族が成立する以前に、子どもにどのようなまなざしが向けられ、どのような子育てが行われてきたのかということが、日記や宗門人別帳や教諭書の検討をもとに記述されている。その後も太田さんは、近世の家族史の研究を継続しており、『「育つ・学ぶ」の社会史』(小山静子との共編著、2008、藤

原書店)。『近世の「家」と家族』(2011、角川叢書）などの仕事がある。しかし和光大学への着任と同時に、太田さんは、近現代の保育の歴史的な研究に着手する。それは保育士養成を担うことへの責任感からだったと思う。

こうして太田さんと私は、一緒に保育を研究するようになった。その仕事はいくつかの種類に分けて捉えることができるが、主要な一つは和光・和光鶴川幼稚園の歴史的な研究である。和光大学と私学共済事業団の資金を得て、和光・和光鶴川幼稚園の資料を収集するとともに、秋野勝紀さん、小松福三さん、山内和子さん、日高聡さんら旧教職員の方々、大瀧三雄さん、保志史子さん、藤田尚子さんら当時の教職員の方々にインタビューを行なった。和光・和光鶴川幼稚園の保育の歴史的な特徴を明らかにすることは、園との協力関係において保育者養成を行う上で重要であっただけではない。インタビューの過程で明確になったのは、二つの園が日本の戦後の保育をリードした実験学校の一つであり、とりわけ知性的な保育を探究しようとした系譜において重要な役割を果たしてきたということである。もう一つは、近代の保育と子育ての歴史的な研究である。その共同研究の成果は、『保育と家庭教育の誕生』(2012、藤原書店）として出版されている。

レッジョ・エミリア市の幼児教育に学ぶということも、私たちの重要な主題であり続けてきた。保育専修でどのような養成を行うかを考えるにあたり、一緒にレッジョについて学ぶ機会をもった。2012 年 3 月には、心理教育学科の教員グループでレッジョ・エミリア市を訪問し、幼児学校の見学こそできなかったものの、ペダゴジスタのパオラ・カバッツィオーニさんからレクチャーを受けることが出来た。驚くのはその後の展開である。太田さんは翌年、パオラさんを日本に呼んで研究交流を行う。公開シンポジウムを行うだけでなく、和光幼稚園で実際に保育を見てもらい、またプロジェクトの報告を聞いてもらって、コメントを求めた。そのアイデアに驚いたし、それを実現する行動力にも驚いた。

その延長上で、太田さんの大きな仕事の一つが今、進行中である。2016 年度にサバティカルをとった太田さんは、突然、スウェーデンを訪問した。レッジョを見ていてはわからないことが、レッジョに学んだスウェーデンを見ればわかるのではないかと思ったのだそうだ。後に太田さんと一緒にスウェーデンを訪問した時に、私は、その直感が素晴らしく核心を突いていたことを知った。レッジョ・エミリア市は、長い時間をかけて、レッジョ・アプローチと呼ばれる教育のやり方を、市の幼児教育の制度や教員養成のシステムとともに構築してきている。レッジョから学ぼうとした時、私の場合は、その包括的な完成度に圧倒される感覚があった。グニラ・ダールベリらを中心とするスウェーデンの研究者や実践者が、失敗や葛藤を経験しながらレッジョに学んだ過程は、その理解の架け橋となってくれるばかりではない。スウェーデンのレッジョ・インスピレーションは、教育を価値や倫理の営みとして捉え、民主主義のプロジェクトとしてのレッジョの教育を重視し、全ての子どもの教育を実践的に変えてきた。その今も継続する過程に、私はすっかり魅了された。

2017 年 12 月には、グニラさんが訪日し、幼児教育史学会と東京大学 Cedep の共催でシンポジウムを開催することができた。保育の世界で国際的に著名なグニラさんを、誰がど

のように日本に呼んだのかと評判になっていたが、その立役者は太田さんである。太田さんとグニラさんは、お互いに、会った瞬間から長年の友達であったかのような感覚を持ったのだそうだ。グニラさんがピーター・モス、アラン・ペンスと三人で著した保育学の国際的に重要な本、『「保育の質」の議論を超えて（*Beyond Quality in Early Childhood Education and Care*）』（2013, Routledge）の翻訳は、太田さんや私を含む翻訳チームで推進中であり、2019年度の出版を目指している。また、グニラさんをはじめとするスウェーデンのレッジョ・インスパイアの研究者、実践者との研究交流も継続していく予定である。

もう一つ、私にとって非常に重要な学びの機会となったのは、2014年から2015年にかけて行った『戦後幼児教育・保育実践記録集』（全Ⅲ期、日本図書センター）の復刻・解説の仕事である。太田さん、東京学芸大学の福元真由美さん、和光大学の大西公恵さん、そして私の4人で、戦後の幼児教育・保育の実践記録を収集し、「表現する子ども」「子どもの生活と仲間関係」「保育のデザイン」の三つのテーマで編集して解説を付したものである。私たちがレッジョにインスパイアされながら編集の枠組みを構成したことは、解説から感じてもらえることと思う。太田さんは、現在の保育への関心と保育の実践や理論の歴史的な展開を柔軟に結びつけ、視野の広い議論を展開していた。私は驚嘆しながらそれを見ていたのだが、とりわけ第Ⅰ期の太田さんの議論から重大な影響を受け、気づいてみたら乾孝の本や論文を集めていた。その研究の一部は、東京大学教育学研究科の紀要にまとめたが、まだまだ検討できていないことも書けていないこともたくさんある。

このように振り返ってみると、私の保育研究は、太田さんの後を付いて歩くなかで、興味深い問題や対象に出会うことによって推進されてきたのだと思う。そのことが分かっているので、私は太田さんの研究の誘いは断らないことにしている。保育士養成を離れたら、もう一度、本格的に江戸の家族史の研究をすすめたいという希望を伺っているが、どのような研究が生み出されるのか楽しみにしている。

［あさい さちこ・東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻准教授］